



研究サポーターの心意気

Willingness of research supporters



河村潤子 Junko KAWAMURA

文部科学省 高等教育局 私学部長

スポーツの世界では、今年バンクーバー冬季オリンピックが開催され、2年後の夏にはロンドンのオリンピックが巡ってくる。テレビの中でインタビューに応える競技者たちは、抱負を述べた後、「応援をよろしくお願いします」と締めくくることが常套句になってきたように思える。それは、悪くない。一人が勝利するまでには、日常の練習を共にするチームからスタジアムで声援する人々まで、生活面、精神面を含めて、直接、間接にその営みをめぐる人たちの支えが欠かせないのだから。

実験系の研究を長く続けてゆくにも、多くの人々の支援がいる。研究の場が提供され、機器や材料が生み出され、納入され、適確に維持管理され、研究時間が確保され、研究成果の発表の場があり、知的財産が保持され、活用されることが必要である。いずれも人手がかかる。これらを含め、研究にかかる費用が適正に取得されなければならない。研究者のすぐ近くにおいて技術的な業務を担う人ばかりでなく、研究をサポートする人々には、実に多くの種類の人たちがいる。

かつて、大学事務局で経理マンとして長い勤務歴を持つ人とともに仕事をした。「あらゆる手を尽くして1円でも安い電球をすばやく探してくる」、これが彼の哲学であり、研究者に対する貢献の姿だった。応援している研究者たちがキャンパス内の発表会で画期的なデータを明らかにしたり、学外の賞を受けたりした報を聞くと、ひそかに祝杯を上げていた。飲兵衛で還暦を迎えずに亡くなってしまったが、研究費を最大限有効に活用し、少しでも多くの実験を可能にという姿勢は、研究者からも理解され信頼されていた。

大学院で宇宙工学や生化学を修めた後研究所に支援スタッフとして就職し、働きながらさらに政策学を究めようとする学徒でもある若者たちにも遭遇した。研究者に能力を発揮してもらうため、ベストの環境をつくりたいと語る。

欧米に比べて日本は研究を支える人の層が薄く、研究者1人当たり0.27人程度という数値はEU平均と比べても半分以下である。「大学教員1人を支えるスタッフ数」を見てもハーバード大学等米国の著名5大学平均の7.6人に対し、東大では2.2人になるという。

研究支援のプロに向かう志にはいろいろなかたちがあり、知識と技の磨き方も様々である。日本の研究拠点がチームとしての力を発揮できるよう、それぞれの持ち場で優れた仕事をする研究支援者が全国で輩出されなければならないと思う。そうして研究者には、研究支援者に対し共に育つパートナーとして「応援をよろしく」の気持ちで接してほしいと願う。研究サポーターを志す人たちの心意気を大成させるのも、くじいて閉ざしてしまうのも、研究者の視線によるところが大きい、と考えるからだ。

英訳版は 588 ページをご参照下さい。English version, see pp 588.

© 2010 The Chemical Society of Japan